

地方の来訪神儀礼に見られる琉球国家祭祀の影響 : 北琉球文化圏を中心に

CASU, Barbara

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

133

(発行年 / Year)

2023-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第563号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2023-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(学術)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026681>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	CASU Barbara
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	第 817 号
学位授与の日付	2023 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 伊藤 達也 副査 准教授 佐々木 達 副査（学外）熊本大学准教授 及川 高

地方の来訪神儀礼に見られる琉球国家祭祀の影響
—北琉球文化圏を中心に—

I. はじめに

カーズ・バーバラ氏提出の学位請求論文『地方の来訪神儀礼に見られる琉球国家祭祀の影響—北琉球文化圏を中心に—』は沖縄本島北部を中心とする文化圏をフィールドとして、中世以降この地域を統治してきた琉球国が地方に敷いた国家祭祀の文化要素が、在来の民俗的要素と関係しながら現地の儀礼に及ぼしていった影響の実像につき、きわめて長い時間的枠組みの中で一貫した見通しを与えることを目指したものである。本論文の構成は以下のとおりである。

序章

第 1 章 琉球列島の来訪神—史料の分析を中心に

はじめに

第 1 節 来訪神とは何なのか

第 2 節 琉球列島の来訪神

第 3 節 史資料で見られる来訪神と来訪神儀礼

第 4 節 琉球国の史料から伝わっている来訪神の性格

おわりに

第 2 章 沖縄本島北部および奄美諸島南部に見られるウンジャミとシヌグ論

初めに

第 1 節 ウンジャミとシヌグが同一年に両方行われている場合の形式

第 2 節 ウンジャミとシヌグ、隔年ごとに行われている場合の要素

第3節 ウンジャミのみが行われている集落の要素

第4節 シヌグのみが行われている集落の要素

第5節 分析結果と推論

補論 事例紹介-奄美大島龍郷町秋名のアラセツ行事

初めに

第1節 ショチョガマ

第2節 平瀬マンカイ

終わりに

第3章 北琉球の来訪神儀礼にみられる外来の要素混入

はじめに

第1節 中国からの要素

第2節 ヤマトからの要素

第3節 ウンジャミとシヌグに見られる外来要素の混入

おわりに

第4章 祭祀の変容と継承問題-伊平屋島字田名のウンジャミとシヌグを事例に

はじめに

第1節 伊平屋島字田名の概況

第2節 ウンジャミの変容

第3節 シヌグの変容

おわりに

終章

参考文献

謝辞

II. 論文の概要

本論は序章と終章のほか、4つの章と1つの補論から構成されている。以下にその構成に即して論文の概要について述べる。

序章

序章では本論全体の目的が論じられる。まず冒頭では2018年に日本の「来訪神：仮面仮装の神々」の祭祀がユネスコの世界文化遺産に登録されたことが、この論文の関心のマクロな背景として言及される。次いで琉球史が概観され、中世における在地王権である琉球国の成立から、明・清との冊封体制の確立、1609年の薩摩侵攻、1879年に完了する琉球処分、そして沖縄地上戦から戦後に至る今日までの歴史像が提示される。そして著者は、この長い時間軸の中で、本論の表題にもある「琉球国家祭祀」と「地方の来訪神儀礼」を一對の構造を

成し、殊に個々の具体的な民俗社会においては緊張関係にあり続けたものとして捉える。すなわち著者の理解では、地方の来訪神儀礼は琉球列島の基層的な文化であり、歴史的にもより古い在来の信仰として位置づけられる。これが中世に琉球国が琉球列島に統一王権を樹立し、地方の祭祀を統制して、王府を中心とした国家祭祀への再編を図るようになると、地方社会においては新たな国家祭祀と在来の来訪神儀礼の間で、宗教的観念や儀礼構造に関して何らかの緊張関係が生じたことが推測される。

以上の大まかな見通しから、著者は今日の沖縄の地方社会に担われている祭祀を、琉球国家祭祀の影響を受けて変容を遂げたものと見做す。この変容とは神観念や祭祀者、祭祀の目的など多岐にわたるが、これを捉えるため著者は、祭祀儀礼を構成する「要素」に着目する。この要素とは本論全体を通じて概ね二項対立的に摘出され、たとえば男性と女性、山の神と海の神、他界観（海上他界と天上他界）、「目に見える神」と「目に見えない神」など多岐にわたる。そして著者はこの構図が、在来の来訪神儀礼と琉球国家祭祀が構成する対構造と重なり合うものと捉え、今日の村落祭祀のあり方を儀礼要素の混淆を経たものとして理解することを目指す。また同時に著者は、こうした歴史的構図が、近現代に沖縄地域社会が過疎などの変容を遂げる中でも、なお一定の規範性を維持しており、文化の継承にあたって明に暗に影響を及ぼしている可能性を示唆する。

このような問題意識に基づいて著者が扱うのは、沖縄本島北部を中心とし、奄美群島も含めた地理的範囲（著者はこれを方言学の定義を参照し「北琉球文化圏」と称している）に分布する「シヌグ」と「ウンジャミ」の祭祀である。シヌグ、ウンジャミはいずれもこの地域に顕著に分布、もしくは過去に分布していたとみられる儀礼行事で、これまでも民俗学においては一個の対を成す祭祀と考えられてきた文化である。著者はこれらの祭祀を主な分析対象として取り上げ、本論の前半においては文献史料から、後半においてはフィールドワークに基づいて、如上の仮説の検証を試みていく。

第1章 琉球列島の来訪神-史料の分析を中心に-

第1章では著者は『琉球神道記』『琉球国由来記』『中山世鑑』等の史料類の分析を行っている。ここで取り上げられる史料類は琉球王府の編纂か、もしくは王府に近い立場の手になるものであり、琉球国の掲げる正統的な宗教観に近しい立場から書かれたものである。著者はこれらのテキストの検討から、大きく以下の2つの点について指摘している。①これらの史料にみえる来訪神には、君真物やキミテズリなど琉球国の国家祭祀に親和的なものがある一方で、山の神（山神）のように、それらとは異質な神もまた記されている。②ウンジャミ（海神祭）の記述は認められるが、それと対をなすはずのシヌグは記述がないに等しい。以上の2点から著者は、これらの要素を琉球国の国家祭祀とは異なる文化要素と見做し、かつ琉球国成立以前の土着的な信仰であると推測する。そして特にシヌグを、先行研究の理解を踏まえ、男性によって担われる来訪神儀礼で、山に関係する祭祀であるとし、かつそれが歴史的にはウンジャミおよび琉球国家祭祀に圧され、基本的には変容と混淆を強いられて

きたものと推測している。

第2章 沖縄本島北部および奄美諸島南部に見られるウンジャミとシヌグ論

第2章では、第1章の構図を踏まえつつ北琉球文化圏を中心とした広範囲に焦点を合わせ、この地域に現存するシヌグ、ウンジャミについて広く検討を加えている。その際に著者が依拠するのは、それぞれの祭祀儀礼に含まれる要素群の比較である。

著者は伊平屋島、伊是名島、伊江島のほか本部町などについて、既存の民俗調査報告や民俗誌の記述に基づき、個々の地域のシヌグ、ウンジャミが含む要素を抽出する。その要素とは祭祀の担い手（司祭）の性差や神観念、祈願の内容など多岐にわたるものの、著者はそれらを広く拾い集めることで、シヌグ、ウンジャミにはそれぞれ、地域を越えて要素の共通性が認められることを確認している。その上で著者は、シヌグ、ウンジャミが共に存続し、対となって継承されている事例だけでなく、隔年で開催されていたり、片方のみが存続しているなどの事例に着目する。そしてそうした事例にみられる祭祀要素の異同のパターンを検討することで、シヌグ、ウンジャミという2つの儀礼が、実態においては相互に要素の混入を生じていること、かつその混入においては「ウンジャミからシヌグへ」という圧力の方がより顕著であることを指摘している。最後に著者はこのような傾向が生じる理由について、女性祭司が担うウンジャミが琉球国家祭祀に親和的であったことから、現地社会においてもよりウンジャミを尊重する傾向が生じ、それが祭祀の要素の継承のあり方に影響を及ぼしたのではないかという仮説を提起している。

補論 事例紹介-奄美大島龍郷町秋名のアラセツ行事

補論は第2章と第3章の間に挿入された小論であり、奄美大島北部の龍郷に伝えられたアラセツ行事について紹介している。アラセツは男性によって担われるショチョガマと、女性祭司が中心となる平瀬マンカイの儀礼から成る民俗行事で、稲の収穫が終わった後、夏の時期に行なわれている。著者はここでこの行事の概要と、自身の現地調査の経験について述べている。このアラセツ儀礼はシヌグ、ウンジャミと同様に男祭と女祭の対で構成されるもので、かつ歴史的経緯のために琉球国家祭祀とは異なる成立過程によるものと推定される。著者は論文全体が扱う北琉球文化圏の祭祀に関して、元来は奄美大島などを含む広がりを持っていた可能性に立っており、この補論ではアラセツという事例からその主張を補っている。

第3章 北琉球の来訪神儀礼にみられる外来の要素混入

第3章は本論の主題であるシヌグ、ウンジャミへの琉球国家祭祀の影響関係を論じるにあたり、その前提となる外来要素についての整理を文献史料から行っている。琉球国は成立後、冊封体制に基づいた貿易によって明・清の各王朝から中華系文化の影響を受け、また1609年に薩摩の侵攻を蒙った後は日本（ヤマト）の政治的監視下に置かれてきた。この国

家間のマクロな力関係は、琉球王府の地方文化に対する影響関係にも反映していくことになる。それがすなわち、著者の言う「外来の要素混入」である。この外来の要素として、著者はハーリー（爬龍船競漕）と神社祭祀、媽祖信仰、ミルク信仰を取り上げ、ここで検討を加えている。

本論の主題とするウンジャミは多くの事例が儀礼の中にハーリーを含んでいる。これは「爬龍船」あるいは「竜船」と称される龍を模したボートを大勢の男性が漕いで競漕するもので、もともと中国東南地域の民俗文化であり、沖縄には大よそ中世後期に広州地方から伝来したものと推測されている。背景には琉球の明王朝に対する冊封体制があり、このために著者のフィールドとする北琉球地域には、中国から琉球王府へ、そこから現地へというステップで移入してきた外来の文化であると考えられる。

著者が取り上げる第二の外来要素は神社祭祀である。琉球は「琉球神道」と一部で称されるような独自の神観念の体系を有しており、かつそれは在地性の強い民俗的な宗教であった。このために日本（ヤマト）のような神を祀るための社（神社）は、沖縄にとって在来の文化とはいえないながら、実際には今日のシヌグには神社を祭場に含む事例が見受けられる。これを著者は中世日本から移入した外来要素が、現地文化に混入した一事例と見ている。

第三に取り上げるミルクは、中近世に大陸から伝わってきた来訪神である。ミルクとは弥勒菩薩のことであり、仏教では遠い未来に現れ衆生を救うメシア的存在とされている。中国の僧侶である布袋上人がこの弥勒と同一視されたことから生まれたのがこのミルクの信仰である。ミルクは仮面をかぶって杖と扇を手にし、沖縄においては豊年祭などの時に現れて踊りを先導するなどの役割を持ち、広い意味での来訪神の一種としての性質を帯びている。著者はこのミルクについて、北部琉球においては明確に外来の要素であることを確かめつつも、村踊り「長者の大王」などのテキストの検討から、ミルク信仰が現地の在来の来訪神の観念と重なり合い、一種の習合を経て移入していると位置づけている。

第四に著者が言及するのは媽祖信仰である。媽祖は中国南東の沿海地域にみられる海洋神で、航海安全を保障する女神である。媽祖信仰は沖縄に限らず、明・清と交易のあった港湾には広く移入が見られる文化であるが、琉球について言えば、那覇周辺に一部分布が見られるに留まり、その影響は限られていた。このことについて著者は、媽祖信仰が沖縄在来のオナリ神信仰、すなわち姉妹が兄弟を霊的に守護するという観念があったことが、媽祖信仰と競合したため、結果的に民俗文化への定着には至らなかったのではないか、という見通しを述べている。

以上のように著者はこの章で、琉球の民俗文化にとって主だった外来要素を取り上げ、個別的に検討することによって、①長い歴史の中で外来文化が沖縄民俗社会に対して一定の圧力をもって移入し続けてきたこと、②その圧力が琉球国の対外的な外交関係や、琉球王府の地方支配という政治的枠組みに強く規定されていたこと、そして最後に、③そうした文化の移入圧に対して、民俗社会が一定の論理性をもって受容し、取捨選択しながら現地の祭祀に組み込んでいたこと、という文化受容をめぐる大まかな構造を描き出している。

第4章 祭祀の変容と継承問題—伊平屋島字田名のウンジャミとシヌグを事例に

第4章ではこれまでの議論で用意した構図に基づき、沖縄本島より北西の洋上にある伊平屋島、田名集落のフィールドワークに基づいた事例分析が行われる。伊平屋島はシヌグ、ウンジャミの分布する地域であり、隣接する伊是名島が尚円王（第二尚氏初代国王）の出生地であるなど、離島ながら文化的には決して辺縁であったわけではなかった。

著者は本章でまず、先行する現地調査のモノグラフから、かつての祭祀の形態について整理する（第1節（3）田名の祭祀状況）。次いで自身の2015年から2019年にかけて実施した現地調査から、かつての祭祀が今日、どのように変容したのかについて、ウンジャミ、シヌグの両方につきその整理を試みる（第2節ウンジャミの変容、第3節シヌグの変容）。この変容のポイントはウンジャミ、シヌグそれぞれに指摘されるが、それらを踏まえて著者は以下の4点を祭祀の変容として抽出する。それが、①祭祀の日程の省略化 ②祭祀の内容の簡略化と省略化 ③祭祀の解釈の変容 ④規制は緩くなってきた の4つの変容である。これらの変容は著者も指摘するように、過疎化や高齢化などの社会全体の変容を基調とした祭祀の衰退（①）と弛緩（④）を示すものであるが、同時に著者はその過程に一定の論理性が伴っていることを指摘する。すなわち祭祀の簡略化（②）においても儀礼上のコアとなる観念は形を変えて残すことや、神歌の読み替え、また儀礼そのものの要点をずらすなどの対応がそれである。またこの結果、著者は田名の祭祀自体の意義も変化し、ウンジャミは「海の神の送迎儀礼」から「喜界島のノロの見送り」へ、シヌグは「男祭り」から「子供祭り」へと、それぞれ変容したと説明している（③）。

以上を踏まえ著者は、田名の祭祀を現在危機にあるものとして、その継承に課題があるとしている。著者のフィールドワークに基づくモノグラフが示したように、比較的近い期間においても変容し、祭祀の内容やその解釈が着々と変化していることの発見に基づく。そのうえで最後に著者は、若年世代に祭祀の重要性を伝えていくことが、今後の継承において課題となるとする私見を述べている。

終章

終章は以上の著者の議論の振り返りと総括が行われる。内容に関しては本要旨が既にみてきた通りであるが、最後に著者は一つの論点として、冒頭に述べたユネスコによる世界文化遺産の指定が今日の沖縄社会が迎えている祭祀継承の危機に対し、一定の好影響をもたらす可能性について言及している。これは世界遺産指定が観光開発や観光客の誘致などにつながるためであるが、本論は最後にこうしたグローバルな文脈のもとに沖縄の来訪神儀礼を置いている。そしてまた自身の構想として、文化的な類似性を見出されるヨーロッパの来訪神儀礼との比較研究の計画に触れ、本論を閉じている。

Ⅲ. 総合的評価

(評価)

本論は沖縄本島北部地域を中心とした文化圏を対象に、文化変容をそれを構成する要素の構造から捉え、その変容のダイナミズムに一定の見通しを与えようとした研究と言える。評価としてまず、本論文の学術上の意義および達成に関し、大きく以下の 3 点を挙げておく。

本論の達成として第一に挙げられるのは、本論が非常に大きな課題に対して取り組み、少なくともその理解にとって一定の補助線となりうる枠組みを提示した、という点である。琉球列島の地方村落社会で担われている民俗文化と、長年にわたりこの地域を支配してきた琉球国の統治の関係を、そのダイナミズムを含めて明らかにするという課題は、民俗学、文化人類学のほか言語学や歴史学、地理学、宗教学などを含む多くの研究者が関心を寄せる大きなテーマである。このテーマに対して、まずは大きな図式として要素からなる構造を整え、それを足掛かりとして歴史的変容につき一定の理解をとにかくも提示したことは、本論の成果の中核をなすものである。惜しむらくはこの図式に関しては十分に完成されたものとは言えず、後に続く研究者が全面的に準拠するには多くの課題を含んでいる。ただ少なくとも、その思考に補助線の一つをもたらすことは確かであり、この点で本論文はこの大きなテーマに関して一定の貢献をなすうる成果であると評価することができる。

第二に挙げられるのは、地理的範疇のユニークさである。沖縄の地域研究は一般に地域を分節化して捉える姿勢に乏しく、「沖縄本島」「先島」などの大まかな区分か、もしくは個々の集落を単位としたモノグラフを基にミクロに分析していくか、ある意味でその両極端に振れる傾向があったことが否めない。これに対して本論は、その中間的範疇となる文化圏（北琉球文化圏）を仮定し、かつそれに基づいた考察に一定の成功を収めている。沖縄諸島を幾つの文化圏に分けうるのか、またその指標は何であるか、といった問題は残るものの、沖縄を複数の文化圏を想定した上で地域文化を論じようとする本論の枠組みは、特に民俗学にとって今後の研究動向に一つの示唆をもたらすものである。

第三に挙げられるのは、著者の領域横断的なアプローチである。著者は特に第 4 章において、現代沖縄をフィールドに、歴史的・長期的な文化上の連続性が、地域の民俗の継承に対し依然として一定の力学として働いていることを示している。これはそれ以前の章において、歴史的な史料を活用して一つの図式を用意したことによる成果であり、現地のフィールドワークによる分析のみでは可視化しえない点を明らかにしている。これはあらためて、著者がその手法として、一つの学問的枠組みに固執せず、民俗誌とフィールドワーク、歴史史料などを柔軟に用いていることの成果である。無論、このようなアプローチには個々の資料の扱いに関する自己批判が求められ、かつ後述のように本論はこの点になお課題を残してはいるものの、著者の研究者としてのディシプリンの柔軟性を示すものとして評価しておきたい。

(批評)

本論は審査の過程で多くの課題が指摘された。論文の構想や大枠に関わる点で、本論の先に著者に問われるべき課題として指摘されたものにつき、ここに3点挙げる。

第一には、論文の資料論に関する問題である。既に述べたように本論は、領域横断的に歴史史料や民俗誌、自身のフィールドノートを縦横に利用することで成り立っているが、それらを用いるにあたっての基準や、史料批判にあたる作業に関しては、著者の中で自覚的に徹底されていたかについてはやや疑問が残った。また特に本論の論考は広範な地理的範疇を研究対象としているため、当然、情報を地図上に落とし、客観的検証の可能なかたちで提示されることが期待されるが、本論の範囲では基本的には文章で論じられるに留まった。これは本論の課題を越えた課題として、著者には議論の内容はともかくとしても、論証過程を読者と共有し、データに基づいて論理的に自身の主張を訴えかけていく手続きにおいて、依然未熟さを認めざるを得ない。翻って今後においては、学術コミュニティの一員たる自覚をもって、他の研究者を説得し、議論するための研鑽に努めることを著者に求めるものである。

第二には、第一に挙げた点とも深く関わるが、自身の問題意識を先行研究とよく結びつけ、それらと対話的に考察を深めていく点に課題が認められる。本研究全体を貫く著者の問題意識は、基本的に著者自身の内発的な関心に強く根ざしており、必ずしも民俗学・民族学そのほかにおいて共有された研究動向や問題意識に十分に文脈化されていない。このことは著者が海外出身ということもあり、よりグローバルな立場から沖縄文化へのまなざしを体现したものとして評価できる面もなくはない。とはいえ沖縄民俗文化の研究は日本国内でも突出した蓄積のあるテーマであり、今回それらと十分に対峙する中で自身の研究を練り上げ、自身の研究の新規性・独自性を確立するにまでは至らなかったことは、やはり今後の課題として指摘せざるを得ない。

第三には本論の論理構成全体において、静的で固定的な図式主義が先行している点である。著者はシヌグ、ウンジャミという事例を論じるにあたって、男性／女性、琉球王府／地方村落、外来／在地、天上／海上、といった対となる要素からなる構造を抽出し、その関係の中での要素の相互混入や、構造間力学による文化移入といった変化のダイナミズムを説明しようとする。この枠組みは確かに一定の成功を収めているものと評価でき、特に本論の設定する極めて長い時間的範疇には有効性が認められる。しかしその一方で、個別事例レベルの分析になると固定化した図式では扱いきれないものが増え、殊に第4章の分析にとってこの図式が必ずしも生きていない点には不満を残している。もちろん自身でも述べている通り、著者は新型コロナウイルス感染症のため、当初予定していた現地調査の計画を見送らざるを得ず、このことが本論の構想を大きく軌道修正せしめた点は同情と共に汲んでおきたい。その上で著者には再びフィールドに赴き、その現場からボトムアップに構築される文化像と、歴史を貫く大きな構造をより丁寧に突き合わせ、それらを止揚したところに本論より更に洗練した文化のダイナミズムの理論を提示する将来を期待したい。

(結論)

以上、本論の達成と今後の著者の課題について各3点ずつ列挙した。既に述べたように本論は多くの課題を積み残すものであるが、それを補ってなお一定の学術的意義と達成を成しえた論考と総評する。

そもそも著者は外国からの留学生であり、その立場から研鑽を重ねて、今回琉球文化に関する一個の理解論を構築し得たこと自体が大いに評価に値する成果である。特に本論の第4章は自身の現地調査に基づいた研究であり、方言が主たる沖縄地方社会において十分なフィールドワークを成し得ていることは、著者の具えた卓越した日本語能力と研究者としての情熱、そしてそれを論考としてまとめ上げる一定以上の学術的構想力を示すものである。新型コロナウイルス感染症によって当初の計画に修正を迫られたことは遺憾ながら、今後、日本・沖縄ネイティブとは異なる視点と関心を持ち味として、広く学術研究に貢献する人材として立ってゆくことを期待するものである。

IV. 結論

審査小委員会は、カーズ・バーバラ氏提出の論文『地方の来訪神儀礼に見られる琉球国家祭祀の影響—北琉球文化圏を中心に—』を上記のように評価し、カーズ・バーバラ氏が博士(学術)の学位に授与される資格を有するものとの結論に達した。